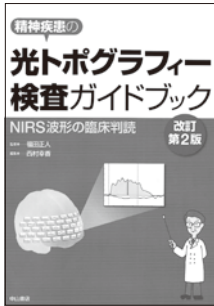


## ■ 書 評



### 精神疾患の光トポグラフィ検査ガイドブック—NIRS 波形の臨床判読 改訂第 2 版—

西村幸香 編集,  
福田正人 監修  
中山書店

2017 年 10 月 160 頁  
本体価格 6,000 円 + 税

2011 年 4 月 15 日に発売された「NIRS 波形の臨床判読—先進医療『うつ症状の光トポグラフィ検査』ガイドブック (初版)」は 2009 年の光トポグラフィ検査 (うつ症状の鑑別診断補助) の先進医療への承認を受けてのものであったが、この度は 2014 年に同検査の保険収載に伴う改訂第 2 版となった。そこで、改訂版ではあるが、本書の題名では初版にあった「先進医療」や「うつ症状」という用語は省かれたシンプルなものになっている。このことはまた光トポグラフィ検査がより一般的なものになっていることを象徴的に示していると思われる。

本書の前半では、保険診療での実施を前提に実際の検査の現場に供するように、光トポグラフィ検査を行う際の概要と注意点について具体的に解説している。その他、評価の書き方、検査に必要な説明文書など、書類の様式例も提示されており、実際の臨床に即した情報が網羅されている。また光トポグラフィ検査装置は複数の会社 (島津製作所、スペクトラテック、日立製作所) で製作されているが、それらの 3 社の装置について、波形表示、用語などの違いの解説されている。

後半では光トポグラフィ検査の基礎的な原理と記録法について解説され、本検査で得られた波形の見方や鑑別アルゴリズムについて詳述している。特に保険収載対象の抑うつ症状を呈する疾患で、うつ病と統合失調症や双極性障害との鑑別が必要な場合に健常者も加えた 47 例もの検査データの解説に加え、代表的な文献での知見も示されている。

光トポグラフィ検査を用いた研究の報告は日本発のものが過半を占め、複数の精神疾患を対象

に行われている。2011 年 1 月 13 日号に Nature 誌に掲載された論説で光トポグラフィ検査の客観性と科学性に関する課題が指摘されたが、その背景を含めた補足が解説されている。解説に記されているように、この日本発といえる光トポグラフィの精神疾患診断への適用については国際的にも関心が高く、日本の精神科医療関係者はこの検査法の発展に貢献できる機会に遭遇しているともいえる。

日本うつ病学会も 2016 年 11 月に十分な臨床評価のなされないままでの光トポグラフィ検査に依存した診断に注意を促す声明を出しており、本検査の位置づけと限界を配慮しつつ、臨床家による丁寧な病態観察に基づく症状解釈や臨床的判断が求められている。機能的な精神疾患についてその症状が指標化され、定量化されることでより正確な診断がもたらされることは重要であるが、さらにはこのような不断の努力が加わることで本検査の有用性が高まると考えられる。

光トポグラフィ検査は今後他の精神疾患にも適応が広がる可能性を持つ。そのためにエビデンスを集積する上で多くの研究者が本検査の施行上の実際を知り、再現性の高い安定した測定がなされることが肝要であり、本書が臨床のみならず研究面でも活用されるような今後に向けた発展も期待される。薬が上市されて、広く使われることによってエビデンスが蓄積されていくが、同様に光トポグラフィ検査もより広く普及し、知見が積み上がることで精神疾患についての診断や理解が深まることにつながっていく。

脳波を扱う多くの検査者や臨床家が「脳波判読 step by step」や「臨床脳波学」などの書籍を参考にするように、実際に光トポグラフィ検査を行う場合の座右の書となる可能性が本書にはあるように思われた。そのような潜在的な意義を含めて、精神疾患の故に困難を感じている患者さんについて客観的指標の 1 つである光トポグラフィ検査が加わることでより適切な診断と治療、そして (再発を含めた) 予防への手がかりがもたらされるような将来のための礎の 1 つとして、本書が有機的に活用されることを期待したい。

(谷井久志)